

ふるさと見て歩き

第58回

上檜沢の満福寺

◆檜沢にあった満福寺と浄因寺

満福寺が開かれた時代は定かではありません。はじめは下檜沢に作られ、少なくとも享徳三年（一四五四）には存在していたことが確認できます。その当時、現在の満福寺の地（上檜沢）には満福寺の末寺の浄因寺がありました。

禅宗であった浄因寺は暦応二年（一二三三）にその存在が確認され、その後、享徳三年（一五三〇）に宥慶法印という僧侶により真言宗の寺として再興されます。文化四年（二八〇七）に水戸藩の学者小宮山楓軒によってまとめられた『水府志料』付録続編の中の「常州那珂郡檜沢村満福寺薬師堂棟札之写」によれば、元龜三年（一五七二）十月八日、白雲という僧侶が薬師如来堂に安置する薬師如来像を新造したとされます（棟札の文言から、像ではなく堂の建物の新造だったという解釈もあります）。浄因寺の禅宗寺院時代の本尊であった薬師如来が、真言宗に変わるときに薬師堂を作って安置された

と推定されます（現在の満福寺の本尊は大日如来坐像）。

一方、満福寺は寛文三年（一六六三）にまとめられた水戸藩領の寺院開基帳によれば、享徳三年（一四五四）に下檜沢大原（最初に満福寺が建てられた地）の鍛冶であった岡崎五郎左衛門が宥真法印という僧侶を招いて開山したものと伝わります。江戸時代に水戸藩がおこなった寺院整理によって浄因寺が廃寺となり、浄因寺を引き継ぐ形で満福寺が現在の上檜沢の地に移りました。



▲春には枝垂れ桜が見事な満福寺

◆満福寺の薬師堂

現在、満福寺の境内には市指定文化財となっている薬師堂山門があります。薬師堂は浄因寺にあったもの

で、満福寺が建てられる際にも浄因寺の一部として引き継がれました。薬師堂はのちに再建されたものですが、山門は修復を重ね現在に至るものです。

屋根の部分は寛政期（十八世末から十九世紀初め頃）、屋根より下の部分は戦国時代末の天正期（十六世紀末）頃のもので推定されます。

切妻の屋根は板葺だったものを、現在はトタンで覆っています。また屋根の下の垂木は繁垂木で、古い形式を残しています。門などの見どころのひとつである臺股（木組を支える部分）には猿面が彫られ、他では見ることのできない珍しい造りとなっています。猿には古来、魔除けの意味合いがこめられていたためでしょう。



▲満福寺薬師堂山門（市指定文化財）



▲猿面の臺股

◆薬師如来像

浄因寺から伝わる薬師堂には鎌倉時代後半の作となる薬師如来像が安置されています。ヒノキ材の一木造で座った状態での高さは七十一センチメートルほど。ほぼ等身大の大きさです。院派風の洗練された作風で、強い後ろ盾のもとで制作されたことを感じさせる仏像です。

※院派とは、平安時代後期から鎌倉時代の仏師の一派で都を中心に活躍しました。



▲木造薬師如来坐像

歴史民俗資料館大宮館

☎ 52-11450